



TITLE:

# 明治初年の横浜公園植栽案について

AUTHOR(S):

白幡, 洋三郎

---

CITATION:

白幡, 洋三郎. 明治初年の横浜公園植栽案について. 京都大学農学部演習林報告 1982, 54: 190-208

ISSUE DATE:

1982-11-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/191748>

RIGHT:

# 明治初年の横浜公園植栽案について

白 幡 洋 三 郎

A Study on the Planting Plans of Yokohama “Public Garden”  
in the Early Years of Meiji Era

Yozaburo SHIRAHATA

## 要 旨

横浜公園造成案として、明治5年、6年、7年の各年に神奈川県の手で作成された「費用調書」が現存する。このうち、明治5年、6年の二つには、詳細な植栽案が付されている。これに従って公園の植栽が行なわれはしなかったが、公園造成に対する明治初年当時の関係者の姿勢をうかがうことができる貴重な資料であると言える。

どのような知識をもった人びとが、当時この植栽案作成にかかわったのか。その人びとのいだいた公園観は、どのようなものか。それらを考察するため、この植栽案を、費用、植物数、植物名などから検討した。

その結果、植栽案は神奈川県名で作成されているが、実際の植物の選択には園芸・植木業にたずさわる者がかかわったことが推察できる。また、最初日本側当事者の強くいだいた公園イメージは、花木と草花が豊かに植えられた花壇と芝生で構成される庭であったと思われる。

そこにみられるのは、欧米に生まれた公園が、独自の築庭術と高度な園芸を有する風土に移しえられたようとした時の、最初の公園理解であろう。

資料として、三つの「費用調書」および植栽案全文を掲げ、特に植物名には、現在の植物呼称、学名等を判明するかぎり書き添え、注を付した。

## 1. は じ め に

横浜公園が造成されるまでのいきさつについては、すでに考察した。（京大演習林報告、第58号 1982）。その際、主としてとりあげたのは、すみやかな造成を要求する外国人達と、安上がりに、しかも造成を少しでも先きに延ばそうとする日本側役人との交渉経緯であり、またそこに示された彼等の公園理解の落差であった。本稿は、そこでは詳述しえなかった植栽案をとりあげて、当時この植栽案作成にかかわった人びとが公園をどのようなものとしてイメージしていたのかを考えてみたい。

『神奈川県史 資料編15』（昭和48年）には、外務省所蔵の横浜公園関係文書のほとんどが収録されており、ここでとりあげる植栽案も載せられている。ただ、わずかながら誤記、誤植がみられること、植物名に解説がなく、公園造成のイメージをつかむ資料として扱いにくいこと、さらに同じ文書が収められている「太政類典」と比較参照がないことを考えあわせ、本稿を草する意味もあると判断した。

## 2. 横浜公園造成費「費用調書」の所在

横浜公園造成費を掲げた神奈川県名による「費用調書」は、居留外国人を代表する各国領事館神奈川県、外務省、大蔵省、太政官の間の交渉・通達など事務連絡文書中にみられる。それは現在、次の二ヶ所に保存されている。

1. 外務省外交資料館 (件名) 第二編 3 門12類 1 項(1)「横浜公園造営並保存一件」
2. 国立公文書館「太政類典 第二編 百十五巻」(第三類 地方二十一 土地処分) 所収「横浜公園ヲ経営ス」

以上二ヶ所の一件書類中に、次の三種の文書が含まれている。(ただし太政類典には(1)(2)のみ)

- (1) 壬申(明治五年)六月付「公園地樹木草花植付周囲外構御入用凡積調書」神奈川県作成
- (2) 明治六年七月付「公園地樹木草花植付周囲外構御入用調書、公園地樹木草花植付 銘書調書」神奈川県作成
- (3) 明治七年三月付「公園造営入費凡調書新調ノ分」神奈川県作成

なお、外務省所蔵文書には、このほかに明治七年十一月二十九日付、外務大少丞より「英国公使館エルネストサトウ貴下」宛文書中に「別紙」として「横浜公園造営入費調書」が含まれている。ここに出てくる必要経費総額は、(3)と同額である。またこれは造営途中の出費状況報告であり、植物名も載せられていないため、ここでは省いた。詳しくは『神奈川県史 資料編15』を参照されたい。

(1)(2)(3)三案を拙稿ですでに「第1案」「第2案」「第3案」と呼んでおり、本稿もそれに従う。各案の総費額の変遷は、表1のとおりである。

表1 横浜公園造成費予算総額の変遷

	案作成年月	予 算 額	第1案を100としたときの各案の比率
1	明治五年六月*	5万50両**	100
2	明治6年7月	3万501円45銭2厘	60
3	明治7年3月	1万2533円88銭4厘	25

\* 旧暦であるため五年六月とした。

\*\* 当時まだ「両」が公式の通貨単位であった。明治5年10月の新貨条例により「円」が用いられることになる。そのときの換算率は、1両=1円=1ドルである。

## 3. 横浜公園植栽計画案とその予算

第1、第2の案には、周囲の柵建造費、土工費の他に、植えつけるべき植物名、寸法、本数等が記され、それは植栽計画案と呼んでよいものであろう。これほど詳細な植栽計画用の植物リストは、これ以前の時代にも、またこれ以後の明治期にも残されていない。つまりこの詳細な植物リストの存在そのものが、当時の関係者の意気込みを反映しているといえよう。

まず、各案の植栽費の変遷と、それが造成費総額に占める百分比を表2に掲げる。

第2案では、第1案にくらべて総額に占める植栽費が80%に増加しているが、これは金額を見ればわかるように、純増ではなく、総額が減少したための相対増である。ただし、植栽費が総額

表2 樹木草花芝植付一式の予算変遷案

	案作成年月	予 算 額	総額に占める割合
1	明治五年六月	2万7500両	55%
2	明治6年7月	2万4424円45銭4厘	80%
3	明治7年3月	6921円70銭7厘*	55%

\* このうち芝植付費は6122円24銭8厘であり、約88%を占める。

の5割を常に越えていることには注目しておく必要がある。池を掘る、石材を用いる、という日本の造園に最も基本的で、最も金額のかさむ土工費が、この案にないことが大きな特徴であった。植栽費が占める割合が大きいのは、そのためであろう。

芝生の植付費は、第1第2両案共に「樹木草花芝植付一式」となっており、それだけを取りあげることはできないが、第3案だけは、芝植付費がいくらかわかる。樹木費が799円45銭9厘、「野芝」張りの費用が、いわゆる「材工とも」で（つまり材料としての芝生そのものの費用と植付け手間賃を合わせて）6122円24銭8厘となっており、9割近くが芝生に用いられる費用であった。第3案に至って花壇が全く抜け落ち、全園に芝生を張り、点景として自然樹形の樹木を配する（昨年度の拙稿参照）プランに変わったのである。（第1、第2案は後に掲げる図1に対し、第3案は図2に対してつくられたもの）

また、第1案が出される明治五年六月には、英国人達が中央のクリケット用広場に、自ら芝生を植えて、その費用570両余の半額を、条約に基づけば日本政府の負担となるはずだと主張して、これを認めさせた。これによって外国人、とりわけ英国人が必要とする芝生地は確保されたため、面積はほとんど同じとはいえ第1案、第2案では、芝生は「花段」の従属的な位置しか占めていない。公園造成費総額の削減と、計画案そのものの変更、つまり第1・第2案の幾何学式案から、第3案の自然式案への変更に伴って、花壇案は削られたのである。

芝生に関するもう1つの変化は、第1・2案ではすべて「高麗芝」が予定されていたにもかかわらず、第3案に至って「野芝」に変わった点である。これも造成費削減に見合う措置であったと考えられる。

#### 4. 植栽計画案の植物数と名称

第1案から第2案への移行に伴い、樹木植付け本数は、約9千本から約6千本へ、草花が2万1千株から1万2千株へ減少した。しかし、樹木の種類の数は変化せず、草花だけ約100種から約70種へ減少しただけである。ところが、第3案では、草花は全くリストに挙げられていない。つまりすでに述べたように花壇が計画から姿を消したのである。しかも植付け樹木数は大巾に減少し、第1案の1割にも足りない629本に激減している。さらに樹種が、いっさい指示されず、本数のみ記されている。この植栽計画案上の大変化は、上に述べたように、造成費の削減と、公園計画案の変化（つまり幾何学式から自然式へ）により生じたものである。以下の表3に、植栽の種類、本数、面積の変遷を掲げる。

次に、なぜ当初計画案、すなわち第1案で100数種、第2案で70数種もの多数の草花の名が「花段」造成のため挙げられたのかを考察してみたい。と同時に、「花段」に植付けを予定されている樹木（花木）と草花の種類選択に原則はなかったのか、また、どのような人々がこの選択にかかわったのだろうかを考えてみたい。そのことを教えてくれる直接の資料がないため、第1案

表3 樹木・草花植付本数および芝生面積の変遷

		第1案 (M. 5)		第2案 (M. 6)		第3案 (M. 7)	
樹	公園内周	6 種	285	410本*	7 種	191本	282本
	125		—		117本		
木	その他						
	公園内各所	40 数 種	5635本	40 数 種	3850本	5ヶ所	230本
	「花 段」	30 数 種	3000本	30 数 種	2160本		
	樹木総計		9045本		6201本		629本
草花(「花段」)		100数種	21000株	70 数 種	12000株		
芝生		高麗芝	13511坪	高麗芝	14776坪	野 芝	13367.353坪

\* 公園内周に285本と書かれ、6種各々の本数が記載されているが、全部を合計すると410本になるため、このように記しておく。

(花木30数種、草花100数種)、第2案(花木80数種、草花70数種)について次のような検討を加えてみた。

- まず、挙げられている植物名のなかに、現在用いられていない名がみられるため、次に挙げる植物書からどれだけその名がひろえるかを考察してみた。
- ついで、それら植物の現在の名称、および学名を、参考のために付した。(資料編、参照)  
参考にした植物書は、各分野、各時期(江戸期)にできるだけまたがるような代表的なものを選んだ。それらを4つのカテゴリーに分類することにする。〔 〕内は使用したもの

#### 1. 本草書

- 貝原益軒 大和本草 宝永六(1709)年〔益軒会編、益軒全集巻之六、明治44年〕
- 小野蘭山 本草綱目啓蒙 享和三(1803)年〔杉本つとむ編、早稲田大学出版部、昭和49年〕

#### 2. 園芸書

- 伊藤三之丞(伊兵衛) 花壇地錦抄 元禄八(1695)年〔京都大学蔵本、元禄八年、「京都版」。京都園芸倶楽部復刻版、昭和8年。加藤要校注 復刻版、平凡社、昭和51年〕
- 伊藤伊兵衛 広益地錦抄 享保四(1719)年〔京都大学蔵本、享保四年。京都園芸倶楽部復刻、昭和16年〕

#### 3. 築庭書

- 北村援琴斎 築山庭造伝 享保二十(1735)年〔京都大学(造園研究室)蔵本、享保二十年。上原敬二編、加島書店、昭和55年〕
- 籙島軒秋里 築山庭造伝後編 文政十一(1828)年〔京都大学(造園学研究室)蔵本。上原敬二編、加島書店、昭和55年〕

#### 4. 植物分類書(欧米の植物学の成果をとり入れた「本草書」)

- 飯沼慾斎 草木図説 安政三(1856)年～文久二(1862)年  
〔牧野富太郎増訂、成美堂、大正2年〕

第1案、第2案の樹木と草花それぞれについて、そこで用いられている名称が、各書でどれくらいひろいことができるかをまとめたものが次の表4である。

なお、公園の内周、および園内各所に植えつけられる予定の樹木(資料編、1ーイ、1ーロ、

表4 「花段」の植物が各種植物書に出現する割合

書 名 (刊 行 年)		第 1 案		第 2 案	
		花 木	草 花	花 木	草 花
1	A. 大和本書 (1709)	20(%)	35(%)	15(%)	35(%)
	B. 本草綱目啓蒙 (1803)	30	35	30	30
2	C. 花壇地錦抄 (1695)	55	40	55	45
	D. 広益地錦抄 (1719)	15	20	15	15
3	E. 築山庭造伝 (1735)	15	5	10	10
	F. 築山庭造伝後編 (1828)	5	5	5	5
4	G. 草木図説 (1856~1862)	70	70	65	70

0%以上5%未満はすべて5%とみなした。

2一イ, 2一ロ) は, 現在も使われている名がほとんどを占めるため, 学名は付記せず, 適宜読みを参考に付記したにとどめた。ただし, これらの樹木にも「花段」の植物と同様のやり方で検討を加えた。その結果は次の四点にまとめられる。

1. リスト 1一イ, 1一ロの前半, に挙げられた樹木(松, 梅, 桜, モッコク, 槇など)は, 本稿の分類の「本草書」「園芸書」「築庭書」に, ひとしく取扱いが出てくるものである。しかも現在も広く一般になじみの深い庭園樹木である。
2. 「中小松類」「丸物類」という言葉使いは, 「築庭書」にみられる。「本草書」「園芸書」にはそのような表現(=分類)の仕方は, みられない。
3. リンゴ, 柿, ナシなどの果木類は「築庭書」には現われないし, 現在も造園にかかわりの深い樹木ではない。「本草書」「園芸書」には, これら果木類が現われる。
4. 結論として, 「花段」以外の植栽として考えられている樹木は, 築庭にかかわる者, 園芸にかかわる者の, いわば「合作リスト」であるといつてよい。

## 5. 考 察

横浜公園植栽案に出てくる植物名に検討を加えた結果, 特に「花段」用植物に特異な点がみられ, それに関し次のような諸点を挙げることができる。

1. 現在使われていない植物名がある一方, 江戸期の各分野の植物書からも判定しえない植物名がある(一天四方, ワケイなど)。
2. 日本に野生している草花を基本とし, 江戸期に海外から渡来した植物(アンジャベル [=カーネーション], ダンドクなど) また幕末に渡来した新奇な植物(サフラン, センナなど) も挙げられている。
3. 本草書を大成した幕末期のものとしての『草木図説』には, 花壇への植栽案に見られる植物名の70%以上が載っている。また園芸書である『花壇地錦抄』からは厳密に数えても, 40~50%が見出しうるのに対し, 築庭書である『築山庭造伝』(そもそも30種に満たない程度の植物名しか挙げられていない) では, 樹木でようやく15%, 草花に至っては, わずか5%しかひろえない。
4. 以上の点から考察をまとめてみると, まず, これほど多くの植物名を挙げるには, 余程の

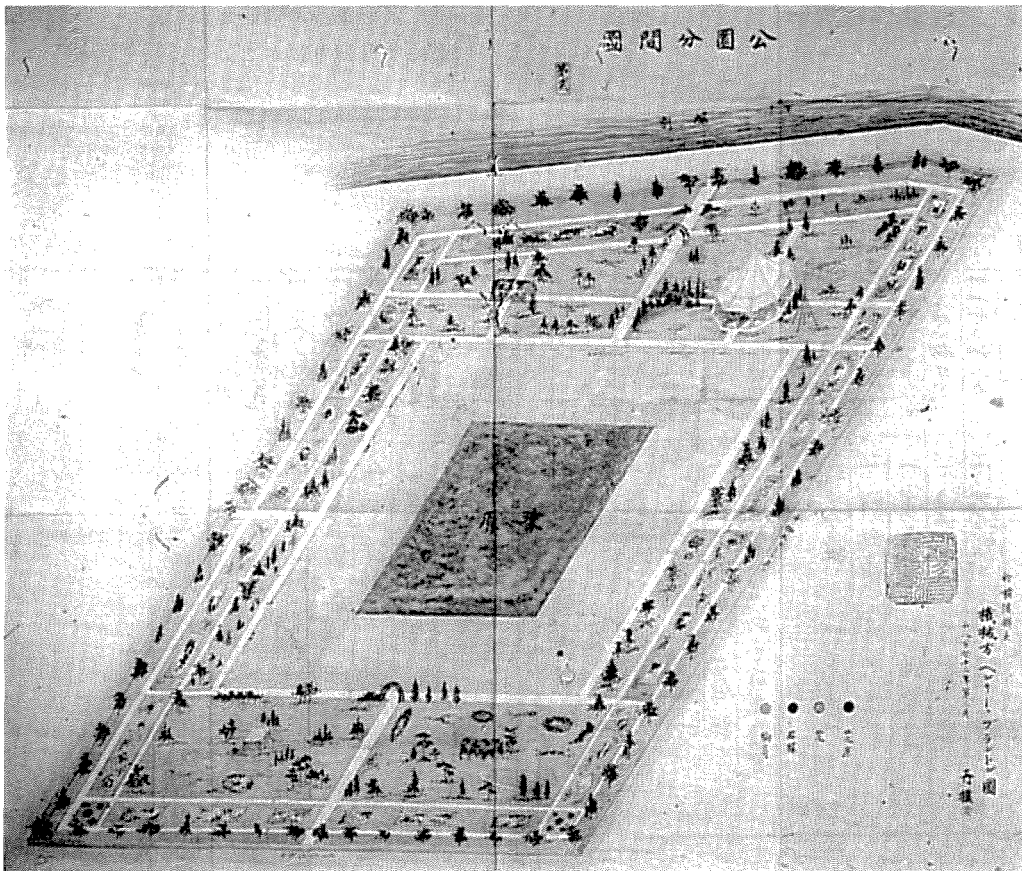
園芸知識が必要とされる。それはすなわち、園芸・植木業者が植物名を挙げたことを推測させる。また、日本の伝統的な築庭にかかわる考え方とは異質なものがここにあらわれているのが強く感じられる。

多種多様な花木や草花が挙げられているのは、外国人達に日本の植物の豊かさを、園芸知識の蓄積を見せつけようとしたためか、あるいは外国人側から要求されたためかは知ることができない。しかし、外国人達の要求する公園への植栽として、きわめて真剣に対応している態度はありありとかがえるのである。

## 6. お わ り に

横浜公園の造成をめぐる交渉は、欧米諸国と日本側の造園に対する姿勢の違いをうきほりにしたと拙稿において筆者は述べた。それは植栽案にも大きな影響を及ぼしているとみられる。

日本側が多種多様な花木、草花のリストを載せた調査をつくりあげた最初の契機は、おそらく外国側の要求であったと考えてよいだろう。しかし、それは日本の園芸がもつ、豊かな伝統を抜きにしては、なしえなかったものということができる。そこでは、伝統的な造園・築庭術では対応できないもの、すなわち花壇が要求されていたからである。



図一 横浜公園設計鳥瞰図。1872年3月にブラントンが作成したもの複製。植栽案の第1、第2案は、ともにこの計画図にもとづいてつくられた。(国立公文書館蔵)







一、根（前後が針葉樹であるからモミか。あるいは明治  
初年に渡来したといわれるヒマラヤスギか。） 但前同断 十五本

一、柳（シダレヤナギ） 但前同断 二十本  
メ（以上6種、410本）

（1—口）

一、中之側四方折廻り諸木模様見計植付候積此樹木数大小取交セ五千六百三十五本  
植付本品左之通（①②……は便宜上筆者が付した数字）

一、①椎	但高九尺ヨリ一丈五尺位迄	百五十本
一、②モツコク	但高五尺ヨリ一丈三尺位迄	五十本
一、③榎	但高六尺ヨリ一丈二尺位迄	百本
一、④榊（ナギ）	但高四尺ヨリ一丈位迄	三十本
一、⑤竹之類	但高一丈ヨリ一丈五六尺位迄	七十本
一、⑥梅	但高一丈二尺ヨリ二丈位迄	二百本
一、⑦桜	但高一丈五尺ヨリ二丈位迄	百本
一、⑧桃	但高六尺ヨリ一丈三四尺位迄	百五十本
一、⑨海棠（カイドウ）	但高六尺ヨリ一丈二尺位迄	百五十本
一、⑩ボケ	但高四尺ヨリ八尺位迄紅白取交	百本
一、⑪椿（ヤブツバキなど）	但高三尺ヨリ一丈二尺位迄	二百本
一、⑫茶山花（サザンカ。明治期には山茶花とつづることは少ない）	但高三尺ヨリ一丈二尺位迄	三百本
一、⑬⑭桧、茶保桧葉（ヒノキ、チャボヒバ）	但高三尺ヨリ一丈五尺位迄	千五百本
一、⑮中小松類（アカマツの丈の低いものか）	但高五尺ヨリ一丈七八尺位迄	二百本
一、⑯丸物類 <sup>5)</sup> （マメツゲ、サツキなどの刈込みか）	但差渡二尺五寸ヨリ五六尺位迄	百株
一、⑰紅葉類（カエデ各種）	但高三尺ヨリ一丈二三尺位迄	七五本
一、⑱玉椿類（マサキか。佐渡ではネズミモチをいう）	但高二尺ヨリ五六尺位迄	百本
一、⑲柳	但高九尺ヨリ二丈位迄	百本
一、⑳李蓮華（モクレン）	但高五六尺ヨリ一丈位迄	百本
一、㉑ミツキ（ミズキ）	但高四尺ヨリ八尺位迄	二十本
一、㉒李セイ（キンモクセイ、ギンモクセイ）	但高五尺ヨリ一丈位迄 金銀取交	三十本
一、㉓キリシマツツジ（キリシマ）	但高三尺ヨリ四五尺位迄	三百本
一、㉔沈丁木（ジンチョウゲ）	但二尺ヨリ四尺位迄	三十本
一、㉕淀川ツツジ（ヨドガワツツジ）	但三尺ヨリ四五尺位迄	二百本
一、㉖黄蓮華（キレンゲツツジ）	但前同断	五十本
一、㉗紅蓮華（ベニレンゲツツジ）	但同	五十本
一、㉘櫻欄（シュロ）	但三尺ヨリ一丈二尺位迄	五十本
一、㉙ソテツ	但二尺ヨリ五六尺位迄	十本
一、㉚芭蕉（バショウ）		三十株
一、㉛⑳㉜密柑 金蜜柑（ダイダイ、ミカン、キンカン）	但三尺ヨリ七八尺位迄三品取交	五十本
一、㉝櫻（カナメモチ）	但五尺ヨリ一丈二尺位迄	二百本
一、㉞リンゴ	但五尺ヨリ八尺位迄	五十本
一、㉟柿	但一丈ヨリ一丈五尺位迄	十五本
一、㊱ナシ	但前同	二十本
一、㊲李（スモモ）	但前同	三十本
一、㊳枇杷（ビワ）	但六尺ヨリ一丈位迄	十本
一、㊴木藤（キブシ）	但四尺ヨリ八尺位迄	二十本
一、㊵花蘇枋（ハナズオウ）	但七尺ヨリ八九尺位迄	十本

一、④高野槇 (コウヤマキ)	但三尺ヨリ五六尺位迄	十本
一、④榎 <sup>6)</sup> (ムクゲか)	但四尺ヨリ一丈位迄	三十本
一、④ユズリハ	但三尺ヨリ一丈位迄	二十本

✎

一、諸木植付風除ケ諸色杉丸太二間末口二寸ヨリ二寸五歩物相用栗丸太ヲ以 <sup>ヒカキ</sup> 扣取イタシ其外大中竹共相用組結之義ハ太榎欄繩ニテ結立諸色左之通		
一、二間末口二寸五歩杉丸太		三千五百本
一、末口二寸位栗丸太長一丈物		千二百本
一、大中竹		四百本
一、太榎欄繩		六千把

✎

一、蔓物門形チ四ヶ所榎欄柱神奈川竹其外割竹染榎欄繩相用取拵植物共左之通り		
一、神奈川竹 (不明)		二百把
一、大中小竹		十把
一、染榎欄繩		五百把
一、藤 (フジ)		一ヶ所
一、蔦 (ナツヅタ)		一ヶ所
一、葡萄 (ブドウ)		一ヶ所
一、桂類 (桂はカヅラに音が似るため園芸家が用いた。サネカヅラ他)		一ヶ所

✎ 四ヶ所出来方

- 1) 「丹」は赤土。
- 2) 横浜公園は、もと沼地で、中央部に遊廓が立並んでいた。その港崎町遊廓が1864年の大火で焼けて公園計画が浮上したのである。湿地を植栽用に改良するために大量の畑土を持ち込む予定にしているわけである。
- 3) 「見越松」という表現は『築山庭造伝 (後編)』に見られる。「差枝物」は、車造りや段造りなどの松のことと思われる。
- 4) 『築山庭造伝』に「榎」とある。松村任三編『植物名彙 (前編)』にはシナノキにあてている。
- 5) 『築山庭造伝 (後編)』に「丸物」という表現があり、図に丸く刈り込まれたかん木が見える。
- 6) 前出松村『植物名彙』ではムクゲに「榎」の字をあてている。

#### (第1案の「花段」植栽案)

##### (1ーハ)

一、花段凡五十ヶ所此地坪凡千二百坪地拵致シ此篩土ヲ以足土持込数品取交セ模様取植付イタシ種類木花類左之通り (原文は植物名が列挙されているのみ)

① 黄梅	(オウバイ, モクセイ科)	<i>Jasminum nudiflorum</i>	A C E G
② 椿	(ツバキ, ツバキ科)	<i>Camellia japonica</i>	A B C D G
③ 紅白ボケ色々	(ボケ, バラ科)	<i>Chaenomeles speciosa</i>	B C G
④ ヒメコブシ(シデコブシ, ヒメコブシ, モクレン科)		<i>Magnolia stellata</i>	C G
⑤ サンシイ	(サンシュユ, ミズキ科)	<i>Cornus officinalis</i>	B G
⑥ マンサク	(マンサク, 同科)	<i>Hamamelis japonica</i>	G
⑦ 錦糸梅	(キンシバイ, オトギリソウ科)	<i>Hypericum patulum</i>	A G
⑧ 美人柳	(ビヨウヤナギ, オトギリソウ科)	<i>Hypericum chinense</i>	
⑨ ハギ類色々	(マメ科)	<i>Lespedeza</i> spp.	A E F
⑩ 尺柳	(不明)	—————	
⑪ 京竹桃	(キョウチクトウ, 同科)	<i>Nerium indicum</i>	

⑫ 卯ツキ類	(ウツギ, ユキノシタ科, または ハコネウツギ, スイカズラ科)	[ <i>Deutzia crenata</i> <i>Weigela coraeensis</i> ]	B	G
⑬ トローキリ(図5)	(ヒギリ, トウギリ, クマツヅラ科)	<i>Clerodendron japonicum</i>	C	G
⑭ 茶山花	(サザンカ, ツバキ科)	<i>Camellia Sasanqua</i>	A C D	F G
⑮ 木藤類	(キブシ, 同科)	<i>Stachurus praecox</i>	B D	
⑯ 浜ボ	(ハマボウ, アオイ科)	<i>Hibiscus Hamabo</i>	B C	G
⑰ 馬酔木	(アセビ, ツツジ科)	<i>Pieris japonica</i>	B C	G
⑱ 山梔子	(クチナシ, アカネ科)	<i>Gardenia jasminoides</i>	B C E	G
⑲ 花石榴	(ハナザクロ, ザクロ科)	<i>Punica Granatum</i>	C	
⑳ ミヅキ	(ミズキ, 同科)	<i>Cornus controversa</i>		G
㉑ 花丁子	(コショウノキ, ジンチョウゲ科)	<i>Daphne kiusiana</i>	C	
㉒ 大手鞠	(テマリバナ, オオテマリ, スイカズラ科)	<i>Viburnum plicatum</i>		
㉓ 雪柳	(ユキヤナギ, バラ科)	<i>Spiraea Thunbergii</i>		G
㉔ 庭桜	(ニワザクラ, バラ科)	<i>Prunus glandulosa</i>		G
㉕ 沈丁木	(ジンチョウゲ, 同科)	<i>Daphne odora</i>	C E	G
㉖ エニシタ	(エニシダ, マメ科)	<i>Sarothamus scoparius</i>		G
㉗ サツキ色々	(サツキツツジ, ツツジ科)	<i>Rhododendron indicum</i>	C E F G	
㉘ 松シマツツジ	(不明)	—————		
㉙ 浜茄子	(ハマナシ, ハマナス, バラ科)	<i>Rosa rugosa</i>	A C D	G
㊀ コデマリ	(コデマリ, バラ科)	<i>Spiraea cantoniensis</i>	C	G
㊁ キリシマツツジ	(キリシマ, ツツジ科)	<i>Rhododendron obtusum</i>	C	G

右之外共品々 ㄱ

三千本取交植付

(1—2)

① 地黄	(ジオウ, ゴマノハグサ科)	<i>Rehmania glutinosa</i>	A B	
② 確草	(不明) (稔草=イカリソウの誤記か)	—————		
③ タンポ	(タンポポ, キク科)	<i>Taraxacum platycarpum</i>	B	G
④ アヤメ	(アヤメ, 同科)	<i>Iris sanguinea</i>	A B C	G
⑤ 黄水仙	(ギズイセン, ヒガンバナ科)	<i>Narcissus Jongquilla</i>		G
⑥ 美人草(図6)	(ヒナゲシ, ケシ科)	<i>Papaver Rhoeas</i>	C	
⑦ 白頭翁	(オキナグサ, キンボウゲ科)	<i>Pulsatilla cernua</i>	B C D	G
⑧ 金仙花	(キンセンカ, キク科)	<i>Calendula arvensis</i>	A B C	G
⑨ シラキク花 <sup>1)</sup>	(アラセイトウか, 2—2参照)	—————		
⑩ 桜草種類	(サクラソウ, 同科)	<i>Primula Sieboldi</i>	A C D	G
⑪ 石竹類	(セキチク, ナデシコ科)	<i>Dianthus chinensis</i>	A C	
⑫ 小田巻草	(オダマキ, キンボウゲ科)	<i>Aquilegia flabellata</i>	C D	G
⑬ 唐松草	(カラマツソウ, 同科)	<i>Thalictrum aquilegifolium</i>	C	G
⑭ ケマン草	(ケマンソウ, ケシ科)	<i>Dicentra spectabilis</i>	C	G
⑮ 雛菊紅白	(ヒナギク, キク科)	<i>Rellis perensis</i>		
⑯ 一天四方	(不明)	—————		
⑰ 福寿草	(フクジュソウ, キンボウゲ科)	<i>Adonis amurensis</i>	A C	G
⑱ 雪割草	(ミスミソウ, キンボウゲ科)	<i>Hepatica nobilis var. japonica</i>		G
⑲ 鹿子草	(カノコソウ, オミナエシ科)	<i>Valeriana fauriei</i>	C	G
㉑ 東菊	(アズマギク, キク科)	<i>Aster dubius</i>		G
㉒ クリン草	(クリンソウ, サクラソウ科)	<i>Primura japonica</i>	C	G
㉓ 牡丹品々	(ボタン, キンボウゲ科)	<i>Paeonia suffruticosa</i>	A B C	G

㉔ 矢車草	(ヤグルマギク, キク科)	<i>Centaurea Cyanus</i>		G
㉕ 小桜草	(不明, サクラソウ属の小さな種, たとえばイワザクラ, ユキワリコザクラなどか)			
㉖ 芍薬種々	(シャクヤク, キンポウゲ科)	<i>Paeonia lactiflora</i>	A B C D E	G
㉗ 泊夫藍 <sup>㉗</sup>	(サフラン, アヤメ科)(サフランモドキ, ヒガンバナ科)	<i>Zephyranthes carinata</i> <i>Crocus sativus</i>	B	G
㉘ 武者リンドウ	(ムシヤリンドウ, シソ科)	<i>Dracocephalum argunense Fisch.</i>		G
㉙ 百合草	百合草(ユリ)の誤記か。	[ <i>Lilium spp.</i> ]	(D)	
㉚ サギ草	(サギソウ, ラン科)	<i>Habenaria radiata</i>	A B	G
㉛ 金魚草	(キンギョソウ, ゴマノハグサ科)	<i>Antirrhinum majus</i>		G
㉜ 夏菊	(不明)	—————	C D	
㉝ 仙翁ルイ	(センノウ, センノウゲ, ナデシコ科)	<i>Lychnis Senno</i>	A C	G
㉞ イチハチ	(イチハツ, アヤメ科)	<i>Iris tectorum</i>	A B E	G
㉟ 白紫段菊	(ダンギク, クマツヅラ科)	<i>Caryopteris incana</i>		G
㊱ シャカ	(シャガ, アヤメ科)	<i>Iris japonica</i>	A C	G
㊲ バリン(図7)	(ネジアヤメ, バリン, アヤメ科)	<i>Iris Pallasii var. chinensis</i>	A B C	G
㊳ 花信夫	(ハナシノブ, 同科)	<i>Polemonium kiuskianum</i>		G
㊴ 風車	(カザグルマ, キンポウゲ科)	<i>Clematis patens</i>	C	
㊵ 鉄線花	(テッセン, 同科)	<i>Clematis florida</i>	B C	
㊶ 紅撫子	(ハマナデシコか, ナデシコ科)	[ <i>Dianthus japonicus</i> ]	C	G
㊷ 羽衣草	(ノコギリソウ, ハゴロモソウ, キク科)	<i>Achillea alpina, A. sibirica</i>		G
㊸ 葵ルイ色々	(フユアオイ, アオイ, アオイ科)	<i>Malva verticillata</i>	A B C	G
㊹ 紅白薊	(ノアザミ, キク科)	<i>Cirsium japonicum</i>	B	G
㊺ ハブ草	(ハブソウ, マメ科)	<i>Cassia accidentalis</i>		G
㊻ クシン <sup>㊻</sup> (図8)	(苦参 クララ, マメ科)	<i>Sophora flavescens</i>	B	G
㊼ 蝦夷菊	(エゾギク, キク科)	<i>Callistephus chinensis</i>		
㊽ イレイセン <sup>㊽</sup> (図9)	(クガイソウ, ゴマノハグサ科)	<i>Veronicastrum sibiricum</i>	A B D	
㊾ 立田瞿麦	(タツタナデシコ, ナデシコ科)	<i>Dianthus Plumarius</i>		
㊿ 舂麻	(アカショウマ, ユキノシタ科)	<i>Astilbe Thunbergii</i>	A B C	G
㊱ アンジャ	(オランダセキチク[カーネーション, アンジャベル], ナデシコ科)	<i>Dianthus Caryophyllus</i>		G
㊲ 紫陽花ルイ	(アジサイ, ユキノシタ科)	<i>Hydrangea macrophylla</i>	C	G
㊳ 紅鹿子	(ベニカノコソウ, オミナエシ科)	<i>Centranthus ruber</i>		G
㊴ 紅黄草	(コウオウソウ[クジャクソウ], キク科)	<i>Tagetes patula</i>	A C	G
㊵ 泡盛草	(アワモリショウマ[アワモリソウ], ユキノシタ科)	<i>Astilbe japonica</i>		G
㊶ 立浪草	(タツナミソウ, シソ科)	<i>Scutellaria indica</i>	B	G
㊷ 天竺牡丹	(ダリア[テンジクボタン], キク科)	<i>Dahlia pinnata</i>		
㊸ 半蘭	(ハラン, ユリ科) か	[ <i>Aspidistra elatior</i> ]	C	
㊹ 井草	(イ, イグサ科)	<i>Juncus effusus var. decipiens</i>		
㊺ 虎ノ尾	(クガイソウ[トラノオ], ゴマノハグサ科)	<i>Veronicastrum sibiricum</i>	B	G
㊻ 宝釈草	(ホウチャクソウ, ユリ科)	<i>Disporum sessile</i>		(G)
㊼ エヒ子蘭	(エビネ, ラン科)	<i>Calanthe discolor</i>	A	G
㊽ 半辺蓮 <sup>㊽</sup> (図10)	(シャジクソウ, マメ科)	<i>Lobelia radicans</i>	B D	G
㊾ 鶴頭草	(ケイトウ, ユリ科) か	[ <i>Celosia cristata</i> ]	(A)	
㊿ 白ゼン <sup>㊿</sup>	(ハクセン, ミカン科) か	[ <i>Dictamnus albus</i> ]	B	
㊱ オウゴン 黄芩	(コガネヤナギ[コガネバナ], シソ科)	<i>Scutellaria baicalensis</i>	B	

⑥ 浦シマ草	(ウラシマソウ, サトイモ科)	<i>Arisaema Urashima</i>	B	
⑦ 夕化粧 (オシロイバナ[ユウゲショウ], オシロイバナ科)		<i>Mirabilis Jalapa</i>	A	G
⑧ 松本仙翁 (マツモト[マツモトセンノウ], ナデシコ科)		<i>Lychnis Sieboldi</i>	BC	G
⑨ 時鳥草	(タイワンホトトギス, ユリ科)	か [ <i>Tricyrtis formosana</i> ]	A C	G
⑩ 女郎花	(オミナエシ, 同科)	<i>Patrinia scabiosaeifolia</i>	ABC	E G
⑪ 桔梗	(キキョウ, 同科)	<i>Platycodon grandiflorum</i>	ABCD	G
⑫ 刈萱	(メガルカヤ; オガルカヤ, イネ科)	<i>Themeda triandra</i> <i>Cymbopogon tortilis</i> var. <i>Goeringii</i>	C	
⑬ 藤袴	(フジバカマ, キク科)	<i>Eupatorium Fortunei</i>	A	G
⑭ 達摩菊	(ダルマギク, キク科)	<i>Aster spathulifolius</i>		G
⑮ 鴈尾 (図11)	(ガンピ, ナデシコ科)	<i>Lychnis coronata</i>	(A) (D)	(G)
⑯ 芙蓉品々	(フヨウ, アオイ科)	<i>Hibiscus mutabilis</i>	C E	G
⑰ 大輪小輪菊品々	(キク科)	<i>Chrysanthemum</i> spp.		
⑱ 烏甲	(トリカブト, キンボウゲ科)	<i>Aconitum chinense</i>	B	G
⑲ 松虫草	(マツムシソウ, 同科)	<i>Scabiosa japonica</i>		G
⑳ ヨキナ草 <sup>9)</sup>	(オキナグサ, キンボウゲ科)	<i>Pulsatilla cernua</i>	B	G
㉑ 時計草	(トケイソウ, 同科)	<i>Passiflora coerulea</i>		
㉒ ワケイ	(不明)	—————		
㉓ 黄蜀葵	(トロロアオイ, アオイ科)	<i>Hibiscus Manihot</i>	D	G
㉔ 紅蜀葵	(モミジアオイ, アオイ科)か	[ <i>Hibiscus coccineus</i> ]	B D	
㉕ 尾花	(ススキ [カヤ], イネ科)	<i>Misconthus sinensis</i>	B	
㉖ 貴船菊	(シュウメイギク [キブネギク], キンボウゲ科)	<i>Anemone hupehensis</i> var. <i>japonica</i>	AB(C)	G
㉗ センナ <sup>9)</sup>	(センナ, マメ科)	<i>Cassia acutifolia</i>		(G)
㉘ 浜エンドウ	(ハマエンドウ, マメ科)	<i>Lathyrus maritimus</i>		
㉙ 立田仙翁	(センノウ, ナデシコ科)	<i>Lychnis Senno</i>		(D)
㊀ ダンドクセン (図12)	(ダンドク, カンナ科)	<i>Canna indica</i>	A C	G
㊁ 浜菊	(ハマギク, キキョウ科)	<i>Chry. nipponicum</i>		
㊂ バラモンジン <sup>10)</sup>	(バラモンジン[ムギナデシコ]キク科)	<i>Tragopogon porrifolius</i>		G
㊃ 沢楷梗	(サワギキョウ, キキョウ科)	<i>Lobelia sessilifolia</i>	A C	G
㊄ 都菊 (ミヤマヨメナ[ミヤコワスレ], キク科)か		[ <i>Gymnaster Savatieri</i> ]		
㊅ 紫苑	(シオン, キク科)	<i>Aster tataricus</i>	ABC	E G
㊆ 鳳仙花	(ホウセンカ, ツリフネソウ科)	<i>Impatiens Balsamina</i>	ABCD	G
㊇ 日扇	(ヒオオギ[カラスオオギ], アヤメ科)	<i>Belamcanda chinensis</i>	ABCD	G
㊈ リウタン	(リンドウ, 同科)	<i>Gentiana scabra</i> var. <i>Buergeri</i>	AB	G
㊉ 水僊	(スイセン, ヒガンバナ科)	<i>Narcissus Tazetta</i> var. <i>sinensis</i>		
㊊ 寒菊色々	(カンギク, キク科)	<i>Chrysanthemum indicum</i>	C	G

右之品々毎二万千株程取交セ植付

一、場所建物地道敷並ニ 敷芝有之候分相除キ 此地坪一万二千八百六十七坪箇土敷平均芝植付此入用芝一万三千五百十一坪

一、道敷小砂利敷平均ロレスニテシキカタメ此砂利八十五坪

右之通御座候以上

壬申六月

1) 紫羅欄花を菊と読み誤ったか、写し間違えたのではないか。

2) 牧野富太郎によれば、サフランモドキが19世紀中葉に日本に渡来し、サフランと呼ばれていたという。サフランは、おくれで幕末に渡来。

- 3) 『草木図説』では苦参をクララと訓じている。
- 4) 『草木図説』ではクカイソウとして「草木威靈仙」と書いている。
- 5) アンジャとはオランダ語アンジャベルの略である。
- 6) 『草木図説』では半边蓮にアゼムシロ（キキョウ科）をあてている。
- 7) スズメノオゴケ（ガガイモ科）を白前と書くこともある。
- 8) ⑦白頭翁（オキナグサ）を別のものと考えべきか。
- 9) 『草木図説』（田中芳男，小野職懋新訂，明治8年）に「センナ，西印度産」と出る。飯沼慾齋原著（安政3年）では「ウエストインデセセンナ」，牧野増訂版（明治40年）では「オホバノハブソウ」となっている。カシアは英名 Senna である。
- 10) 『最新園芸大辞典』（誠文堂新光社，第1巻，昭和43年）では，わが国最初の記録を「明治6年（開拓使，1872）」としているが，この横浜公園計画案の方が古い。

## （第二案）

公園地樹木草花植付銘書調帳 神奈川県

一、公園地草木植付場所限（沼の誤りか）地理立ニ付土取除土丹岩等築<sup>つきかた</sup>堅<sup>じびしらえ</sup>め地拵<sup>し</sup>致シ植土不足之分千七百八坪八合余持込草花植付場所者<sup>は</sup>備土入敷平均芝植付場所凡七拾坪合千七百七拾八坪八合余太田村地内ヨリ運送之積

一、四方縁通り江諸木植付之儀式間宅本宛植付候積リ

此樹木数百九拾宅本

植木品左之通

### （2一イ）

一、松指枝物中透造りとも取交	拾五本	但高サ貳間ヨリ三間位迄巾九尺ヨリ貳間半迄
一、見越造り生立形之松	七拾本	但右同断
一、椎	貳拾本	但右同断
一、桜	三拾本	但右同断
一、榎	貳拾本	但右同断
一、楓	貳拾本	但高サ三間ヨリ三間半迄
一、楓	拾本	但右同断
一、枝垂柳	六本	但右同断

一、中之側四方折廻シ諸木模様見計植付候積此樹木数大小取交三千八百五拾本

植付品左之通

### （2一口）（なお1一ロと同じものは番号○で示した）

一、⑥梅	百五拾本	但高サ壹丈ヨリ壹丈五尺迄
一、⑦桜	五拾本	但右同断
一、⑧桃	五拾本	但右同断
一、⑨海棠	百本	但右同断
一、⑩紅白木瓜	百本	但高サ三尺ヨリ八尺位迄
一、⑪椿	七拾本	但高サ五尺ヨリ壹丈貳尺位迄
一、⑫山茶花	百五拾本	但右同断
一、⑬茶穂桧葉	三百本	但高三尺ヨリ壹丈貳尺迄
一、⑭糸桧葉桧類（イトヒバ）	三百本	但右同断
一、⑮蘇鉄	五株	但高サ七尺ヨリ壹丈余迄
一、⑯中透造松	拾本	但高サ八尺ヨリ壹丈三尺位迄巾貳間ヨリ貳間半位迄
一、⑰生立造り之松	百本	但高サ五尺ヨリ壹丈貳尺位迄
一、⑱丸物類品々	百五拾本	但差渡貳尺ヨリ六尺位迄

一、①紅葉	五百本	但高サ三尺ヨリ壹丈余迄
一、②枝垂柳	五拾本	但高サ八尺ヨリ壹丈貳尺迄
一、③木蓮花（モクレン）	七拾本	但高サ五尺ヨリ九尺位迄
一、④金銀木犀	三拾本	但高サ五尺ヨリ八尺余迄
一、⑤⑥黄、紅蓮花躑躅	五拾本	但高サ三尺ヨリ四尺余迄
一、⑦唐櫻栢	三拾本	但高サ三尺ヨリ壹丈余迄
一、⑧芭蕉	拾株	但五尺ヨリ八尺位迄
一、⑨竹之類	五拾株	
一、⑩橙	拾五本	但高サ四尺ヨリ六尺位迄
一、⑪密柑	拾五本	但右同断
一、⑫金柑	拾本	但右同断
一、⑬櫻	百本	但高サ四尺ヨリ壹丈貳尺余迄
一、⑭林檎	三拾本	但高サ六尺ヨリ壹丈位迄
一、⑮柿	拾五本	但右同断
一、杏	拾本	但右同断
一、⑯梨子（ナシ）	拾五本	但右同断
一、⑰枇杷	拾五本	但右同断
一、⑱花蘇木（花蘇枋＝ハナズオウ）	拾五本	但高サ七八尺位
一、⑲槲	五拾本	但高サ四尺ヨリ八九尺迄
一、⑳高野槲	貳拾本	但高サ四尺ヨリ七尺余迄
一、㉑椴	五拾本	但高サ三尺ヨリ壹丈余迄
一、㉒沈丁木	貳拾本	但高サ貳尺ヨリ三尺位迄差渡三四尺位迄
一、㉓霧嶋躑躅（キリシマ）	貳百本	但高サ三尺ヨリ六尺迄
一、㉔淀川躑躅（ボタンツツジ）	百五拾本	但高サ三尺ヨリ五六尺迄
一、琉球躑躅（不明）	百本	但高サ右同断
一、㉕譲り葉（ユズリハ）	五拾本	但五尺ヨリ八尺余迄
一、櫟（カシワ、クスギ）	百本	但高サ四尺ヨリ壹丈余迄
一、①椎	百五拾本	但高サ七尺ヨリ壹丈貳尺迄
一、③槲	百五拾本	但右同断
一、白髭、五葉松（ゴヨウマツ）	貳拾五本	但高サ五尺ヨリ八九尺迄
一、杉	百五拾本	但高サ四尺ヨリ壹丈位迄
一、伽羅木造り木 <sup>㉖</sup> （キャラボク仕立物）	貳拾本	但高サ五尺ヨリ九尺余位巾リ
一、ドウタン（ドウダンツツジ）	五拾本	但右同断
一、諸木植付風除諸色杉丸太貳間末口貳寸五歩ヨリ三寸物相用栗丸太ヲ以控取致シ其外大中竹とも相用細結之義者太櫻栢 <sup>㉗</sup> 細ニ而結立諸色左之通		
一、貳間之末口貳寸五歩三寸杉丸太		三千本
一、末口二寸ヨリ貳五歩物栗丸太長壹丈物		千本
一、大中竹		三百五十束
一、太櫻栢細		五千三百把
一、細仙白蕨 <sup>㉘</sup> 細 <sup>㉙</sup>		三百把
一、蔓物門形四ヶ所櫻栢柱神奈川竹其外割竹染櫻栢相用取拵植物共左之通		
一、神奈川竹（不明）		貳五束
一、大中小竹		拾束
一、染櫻栢細		四百把
一、蕨細		五拾把
一、抗木丸太		三拾本



一、藤  
 一、蔦（ナツヅタ）  
 一、葡萄（ブドウ）  
 一、葛（スイカズラなど）  
 ♪ 四ヶ所 出来方

壺ヶ所  
 同  
 同  
 同

1) 「仕立てもの」の意であらう。

2) ワラビの繊維からつくった紐。京都芸術短期大学の尼崎博正氏によれば、今も使われることがあるとのことである。

（第2案の「花段」植栽案）

一、花段凡五拾ヶ所此地坪凡千四百四拾坪地拵致シ篩土ヲ以足土持込数品取交模様取付致シ種類木花類左之通り

（2一ハ）（1一ハと同じ名称のものは番号○で示した。（8）は⑧と同じではないか、を表す）

一、黄 <sup>ク</sup> 梅①	一、石楠木*1	一、サンシイ⑤
一、ヒメコブシ④	一、唐桐⑬（図5）	一、美女柳(8)*2
一、錦糸梅⑦*3	一、椿②	一、杏竹桃⑪
一、山茶花⑭	一、松嶋躑躅⑮	一、林生梅*4
一、木 <sup>ク</sup> 瓜③	一、霧嶋躑躅⑯	一、草月躑躅⑰
一、マンサク⑥	一、馬酔木⑰	一、小手櫛⑱
一、荊之類*5	一、ミヅ木⑲	一、紫陽花⑤⑥
一、宇津木⑫	一、雪柳⑳	一、木藤⑮
一、エニシダ㉔	一、濱 <sup>ヘマ</sup> 穂⑮	一、濱 <sup>ヘマ</sup> 茄子㉔
一、花柘榴⑱	一、牡丹㉔*7	一、大手櫛㉔
一、花丁子㉔	一、沈 <sup>ヘマ</sup> 丁木㉔	一、庭桜㉔

右之外共品々 ♪ 式千百六拾本取交植付

\*1 シャクナゲ（ツツジ科） *Rhododendron Metternichii*

\*2 第1案にある「美人柳」のことか ——

\*3 キンシバイ『大和本草』に金糸梅、クサヤマブキとある

\*4 不明 ——

\*5 『花壇地錦抄』には「荊棘のるい」として、バラ属の12種を挙げている。

\*6 アジサイは第1案では草本の中に挙げられている。

\*7 ボタンは第1案では草本の中に挙げられている。

（2一ニ）（1一ニと同じ名称のものは番号○印で示した）

一、地黄①	一、夏菊⑪	一、東菊⑪
一、菖蒲*1	一、紫白段菊⑭	一、矢車草㉔
一、桜草⑩	一、黄水仙⑤	一、泊 <sup>サフラン</sup> 夫藍㉔
一、唐松草⑬	一、金泉花⑧	一、驚草㉔
一、一天四方⑯	一、石竹⑪	一、僊翁㉔
一、鹿子草⑱	一、撫子⑯	一、著莪㉔
一、芍 <sup>シヤクナゲ</sup> 薬㉔	一、ケンマン草⑭	一、蒲公英③
一、百合㉔	一、福寿草⑰	一、美人草⑥（図6）
一、紫羅蘭花*2⑨	一、龍膽㉔	一、風車㉔



図-5



図-6

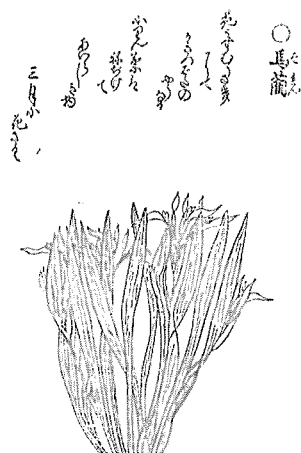


図-7



図-8



図-9



図-10

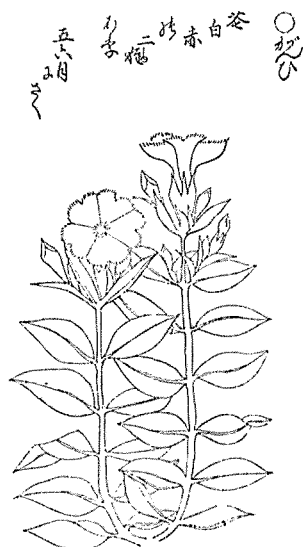


図-11



図-12



図-13

図5, 6, 7, 11, 12, 13は、伊藤三之丞『草花絵前集』（元禄12, 1699年）京都大学蔵本より。

図8, 9, 10は、『広益地錦抄』京都大学蔵本より。

一、小手巻草 <sup>*3</sup> ⑬	一、荊（2一ハに出る）	一、巴子草 <sup>*4</sup>
一、雄菊⑮	一、蝦夷菊⑮	一、イレイセン <sup>47</sup> （図9）
一、雪割草⑮	一、升麻⑮	一、立田瞿麦⑮
一、九輪草⑮	一、夏雪草 <sup>*5</sup>	一、アンジャ瞿麦⑮
一、小桜草⑮	一、立波草⑮	一、天竺牡丹⑮
一、武者龍膽⑮	一、海老根蘭⑮	一、紅黄草⑮
一、金魚草⑮	一、澤桔梗⑮	一、半边蓮 <sup>⑮</sup> （図10）
一、一八 <sup>イチハツ</sup> ⑮	一、白セン⑮	一、日々草 <sup>*6</sup>
一、バリン⑮（図7）	一、鉄扇 <sup>⑮</sup>	一、葵 <sup>⑮</sup>
一、紫陽花⑮	一、雁皮 <sup>⑮</sup> （図11）	一、海芋 <sup>*7</sup>
一、泡盛草⑮	一、秋菊 <sup>*8</sup> （図13）	一、杜若 <sup>*9</sup>
一、時鳥草⑮	一、小菊 <sup>*10</sup>	一、三ツ柏草 <sup>*11</sup>
一、桔梗⑮	一、水憐 <sup>スイレン</sup> ⑮	一、河骨 <sup>*12</sup>
一、刈萱⑮	一、寒菊⑮	一、女郎花⑮
一、芙蓉⑮	一、藤袴⑮	一、蜀葵⑮
一、檀特草⑮（図12）	一、三ツ形草 <sup>*13</sup>	一、緋扇 <sup>⑮</sup>
一、濱菊⑮	一、センナ <sup>⑮</sup>	一、花菖蒲 <sup>*14</sup>

右品々 壹万貳千株程取交植付

一、場所建物地道敷並敷芝有之分相除

此地坪壹万三千四百三拾貳坪九合篩土敷平均芝植付

此入用芝壹万四千七百七拾六坪余

一、道敷地盤水取宜ロレスニ而敷平均貝殻厚壹寸五歩ニ敷

此入用貝殻立坪八拾五坪三合

右之通御座候以上

明治六年七月

*1 ショウブ（サトイモ科）	<i>Acorus calamus</i> var. <i>angustatus</i>	A B C E
ただし、漢名「菖蒲」であればセキショウとも考えられる。		
*2 第1案の「シラキク花」か。外務省資料は <i>Matthiola incana</i> 「菊」とも「蘭」とも読めるが、「太政類典」では明らかに楷書で「紫羅蘭花」となっており、そうであれば『草木図説』にアラセントウと出ている。		A G
*3 第1案「小田巻草」と同じものと思われる。		
*4 トモエソウ（オトギリソウ科）	<i>Hypericum Ascyron</i>	G
*5 ナツユキソウ（バラ科）	<i>Filipendula purpurea</i>	G
*6 ニチニチソウ（キョウチクソウ科）	<i>Vinca rosea</i>	(G)
*7 オランダカイウ（サトイモ科）か	<i>Zantedeschia aethiopica</i>	B
*8 『花壇地錦抄』には「菊のるい 末より冬初」として百数十の名を挙げ「これ迄 秋菊のるい」と記している。		
*9 カキツバタ（アヤメ科）	<i>Iris ensata</i> var. <i>spontanea</i>	C F
*10 不明。単に小形の菊を指すのか。		
*11 ミツガシワ（リンドウ科）	<i>Menyanthes trifoliata</i>	B G
*12 コウホネ（スイレン科）	<i>Nuphar japonicum</i>	B G
*13 不明。		
*14 ハナショウブ（アヤメ科）	<i>Iris laevigata</i>	C G

### （第3案）

公園造営入費凡調書新調ノ分

一、長延五百六十老間七分五厘 高地上四尺

外構塙根

代金千十疋四十五銭	但老間ニ付金疋四八十銭
一、長延五百六十疋間七分五厘高九尺ヨリ 老丈二尺迄之樹木二間毎ニ 老本通植込此木数二百八十二本並三隅植込木数百十七本 代金五百七十四銭九厘	但老本ニ付金疋四二十七銭五厘
一、五ヶ所植込木数寄ヲ二百三十本 代金二百九十二円三十三銭	但老本ニ付金高前同断
一、野芝寄テ老万三千三百六十七坪三合五勺三才、但地形高下平均共 代金六千二百二十二円二十四銭八厘	但老坪ニ付金四十五銭八厘
一、道路修造寄テ四千三百四十四坪四合六勺 代金三千八百二十三円十二銭五厘	但老坪ニ付金八十八銭
一、明二間、扉高六尺 宛二ヶ所 木戸門 代金四十円	但老ヶ所金二十円
一、明老間、扉高六尺 宛四ヶ所 木戸門 代金七十二円	但老ヶ所金十八円
一、家坪十二坪 取締人住居 代金二百四十円	但老坪ニ付金二十円
一、凡長延九百二十二間二分八厘 筒五樋伏込 代金二百二円九十銭二厘	但老間ニ付金二十二銭
一、内法老尺五寸四方深四尺 二十ヶ所石榴樹 代金百七十円	但老ヶ所金八円五十銭
一、大サ八寸四方 四十銅細 代金十四円	但老ツ金三十五銭
一、長老間巾二尺 三十脚 腰掛 代金三十九円	但老脚ニ付金疋四三十銭
合金老万二千五百三十三円八十八銭四厘	
右之通ニ御座候	
明治七年三月	

## Summary

There are three planting plans existing for the "Public Garden" in Yokohama. The first plan was developed in 1872, the second one in 1873, and the last one in 1874. The former two have the detailed lists of plant names. Though the finished "Public Garden" was not made according to the two plans, they are very useful in understanding the concept of the public garden (Koen) in the early years of Meiji-Era.

The author analyzed the costs, the number of plants and the plant names in order to discern what knowledge the persons concerned had when they made up the plans, and what ideas they had on the public garden. The results are as follows:

1. The persons concerned had much knowledge about flower gardening (i.e. plants names and horticultural experiences, such that the knowledge was something more than the traditional knowledge of garden making)
2. Their concept of public garden in those days was that it is the place consisting of lawns, beds of flowering trees and wild flowering grasses.

The above points demonstrate the attitude of the Japanese who intended to transplant the European public garden into Japan, though they already had their own long tradition of garden building.

〔付記〕 植物名については、京都大学名誉教授北村四郎氏、特に園芸植物については、京都大学名誉教授塚本洋太郎氏、また植物名記載上の方法全般については京都大学教養部助教授堀田満氏にそれぞれ助言をいただいた。

本稿全体を造園学研究室中村一教授に校閲していただいた。記して以上各氏に謝意をあらわしたい。